

野口英世と切手（第1報）*

谷津 三雄** 渋谷 鉦** 吉村宅弘**

最近の名著、古川明著¹⁾「切手が語る医学のあゆみ」（医歯薬出版、1986年）の427～428ページに野口英世の項、図Ⅷ-243野口英世（文化人切手）〔日本1949〕と図Ⅷ-244エクアドルで発行された生誕100年記念の野口英世（エクアドル1976）の2つの野口英世に関する切手が掲載されている（図1）。

そのうち、図243には「1949年（昭和24）11月3日の文化の日に発行された日本文化人切手第1

号」で野口英世の肖像が描かれている。

そこで、著者らの一人谷津が架蔵する高久 茂²⁾編集：切手になった日本文化人（一二三書房、昭和28年3月20日発行）を参考資料とし歯学史研究の一端としたい。

なお、高山歯科医学院で野口英世と寝食を共にした石塚三郎³⁾の「野口英世博士の生涯」の記事をそのまま摘録し参考に供したい。「野口英世と石塚三郎について」は本間邦則氏（日本歯科医史学会会誌、第1巻第1号、75ページ、1973年8月発行）により紹介されているので併読されんことを望む次第である。

切手になった日本文化人

切手となった18人の文化人のうち第1号が野口英世である。そして、この文化人切手の発行について一主として発行までの経緯—を中村宗文氏がその並々ならぬ苦勞の過程を記されている¹⁾。

上段に、野口博士の肖像画と下段にカラーによる野口英世の生地からのぞんだ磐梯山の写真を添え（図2）、裏面に文化人切手（1）—学術関係、野口英世、発行日、昭和24年11月3日、種類、八円切手一種、意匠、野口英世の肖像刷色、濃緑色、印面の大きさ、縦25.5ミリ、横23ミリ、版式、彫刻凹版、発行数3000万枚、シートの構成、縦5枚、横4枚の20面版、原画作者、木村勝氏、原版彫刻者加藤倉吉氏と記されている。

なお、石塚三郎による「野口英世博士の生涯」と題し39～44ページ³⁾、また、関山英夫による「若き日の野口英世（1876～1928）」と題し、また略歴が49～50ページに詳細に記されている。この石塚、関山両氏の文章の内容から野口英世と高山歯科医学院そして血脇守之助との関係がよく理解で



図Ⅷ-243 野口英世（文化人切手）
〔日本 1949, # 480, A248〕



図Ⅷ-244 エクアドルで発行された生誕100年
記念の野口英世
〔エクアドル 1976, C591, AP144〕

図1

* Hideyo Noguchi and Stamp (1st report)

** Mitsuo Yatsu, Ko Shibutani and Takuhiro Yoshimura: Nihon University School of Dentistry at Matsudo, Department of Anesthesiology 日本大学松戸歯学部麻酔学教室



野口博士の生地からのぞんだ磐梯山

図2

きる。

石塚三郎著、野口英世博士の生涯

野口英世博士は、日本貧農の家に生れたるも、自力奮闘、渡米後、医者として科学者として大成されたが終にアフリカ西海岸アクラで、黄熱病研究の犠牲となりて、世界人類の為に壮烈なる最後を遂げられた。その五十三年の生涯は、懦夫をも起たしめる立志伝中の人であり、又感恩感謝、忍耐努力の結晶は、後進生徒の亀鑑ともなるのである。

往年郵便文化人切手の発行を計画された際、松平宮内大臣より写真数種借用したいとの事で、当記念会に御申越になった。本会より提出したのが最初第一番に採用発行されたのである。

皇太子殿下が、語学の先生として招聘されたアメリカのヴァイニング女史は、ある日、殿下並に学友の方々に向って「今学期は二十世紀に於ける偉大なる人物を研究しましょう」と云う題下で、各自から答案を募りましたその中に野口英世博士は優位の内に挙げられています。まことや昨今の趨勢は、全国各学校生徒に対し、「わが最も尊敬する人物」と云う題下には、異口同音、野口博士を第一に挙げられている。去る者日に疎しの諺と反対に年一年と博士の功績は認められ、敬慕する者日を逐うて夥くなっている。私は青年苦学時代、彼と東京芝伊皿子の高山歯科医学院で寝食を共にし、同床異夢、勿効の交を結んだのである。

彼は明治九年十一月九日、福島県会津若松市から東北へ四里、磐梯山麓猪苗代湖畔の寒村、翁島三城潟に呱呱の声をあげた。父は好酒家で一銭一厘も酒代にしてしまうと云う風で、ために家庭は赤貧洗うが如く、僅かに母しか女のか弱い小銭かせぎで糊口をしのぎで有様であった。随ってしか女は十分に赤ん坊の面倒を見るひまもなかった。

彼が三歳の時匍匐して囲炉裡の中へ左手を突込み攪絆稍久うしたので大火傷を負ってしまった。医者にかけようにも医療費がない。左手は石ころの様に手のひらに癒着してしまった。そのため彼は子供時代を通じててん棒々々と嘲笑された。しかしこの災難は彼にとって必ずしも永遠の不幸にはならなかった。母しか女は何とでもしてこの不具の児を一人前にせねばと云う念慮に駆られ、彼も亦生れつきの負けじ魂に一層拍車をかけて「今に見ろ」の努力を続けることができたのである。尋常小学校時代の彼の成績は拔群であった。その頃の小学校の卒業認定は厳格で、学校外から試験員が派遣されたものであるが、彼の卒業の時に派遣されて来た猪苗代高等小学校の首席訓導小林栄氏は、試験場で彼の非凡な才能を見出し、遂に一生の間恩師恩父となって援助された。

彼は十四歳で小林先生の尽力により猪苗代高等小学校に入学した。この時代で彼のような貧乏者が、高等小学校にはいるなどは全く異例であったのであるが、彼はここで天与の才能と驚くべき努力振りを発揮した。所が彼の左手のてん棒だけは

彼の力ではどうにもならない。彼の心中を察した小林先生や学友たちは醸金し合って米国帰りの渡部ドクトル（会津会陽医院）の手術をうけさせた。手術の結果石ころの様なてん棒もどうやら手のひら形が出来て一応の役に立つようになった。母しか女は泣いて喜んだ。彼は狂喜したばかりでなく、しみじみと医術の偉大なる仁徳に感激した。飽くまで医術を研究して人類のために一生を捧げんとする決意をしたのである。彼は高等小学校を卒業するや会陽医院の書生となり、寸暇を割いて英、独、仏語と漢字を修めた。独学で医者になろうと云う彼の努力が始まったのである。而して日清戦争前後の四年間をここで過ごした。

当時偶然記高山歯科医学院の主事血脇守之助氏が、治療のため若松に出張、知人の間である渡部ドクトルを訪ねられた。その時書生の野口が難解な病理学の本を読んでのを見て驚いたのであるが、これが後日血脇氏と彼との関係の機縁となった。即ち二十一歳の彼は上京して医術開業の前期試験に合格、血脇氏を訪ねたが見込ある彼の将来に嘱望した氏は、院長の反対にも拘わらず彼を同院の学僕にし寄宿舎に置いたのである。

恰度その頃私も越後の田舎から出京、同郷の先輩市嶋謙吉氏の紹介状を以て高山歯科医学院の学僕を志願し、学院の玄関をまたいたところ、私と同年輩の青年で縞木綿の袴に古びた袴——しかしがっちりした体格、不屈の気象を見せる眼の底光り——これが即ち野口君だったのである。私の志願は仲々許されなかった。何回目かの訪問の時、彼は気の毒に思っただけ、「まァ一寸上り給え」と書生部屋に入れてくれた。ここでお互の身の上話をしているうち、少年時代の不遇な共通点をもつ二人は、知らず識らず親し味を加え、同じ東北の出身者が図らず落合った奇縁に相互協力を誓うことに順致し、私と彼との断金親交は愈々始まった。やがて私の入院も叶った。

左手の不自由なのに同情した私は、ランプ掃除やその他の労働を代って一身に引受け、彼に勉強時間を与えたのを生涯の徳として、毎も感謝されたのは彼の純真さを物語るものである。肝胆相照の間柄に在る彼は私に向って「男子斯世に生を享

く、須らく為す有る人物とならねばならぬ、御互に済済済民の大業に尽そうじゃないか」と励まし合った程である。彼は遂に素志を貫徹して断然世界的医聖となった。お蔭で刺激された私も、翌年かなりの成績で歯科試験にパスし、恩師血脇先生の渡清後、学院の経営一切を委任されたり、全国で嚆矢と謂われた歯科病院を新潟に創設したり、衆議院議員にも当選し、彼の創意による霊薬パプラーを完成し、専念国家社会に仁済すべく、老青年となりて遍に野口博士の精神を遵奉し、日夜感謝感激している次第である。

彼は二十二歳の秋、八十八名の受験者中、四人の中の一人として見事医術開業後期試験に合格し、順天堂病院の助手となり、引続き北里伝染病研究所の助手を拝命し、その傍高山歯科医学院の講師をも兼任した。学院では一年前の学僕野口が一躍講師になったので学生たちも初めは驚いたらしかったが、独学者の体験から割出された親切な講義振りりと、豪快な風格に心服してしまった。後年成功後の追懐談中に、よく当時のことを奇抜であり痛快事であったとされていた。さもあらなむ。

北里研究所は殆ど帝大出身者であるから、所長北里博士は、「野口君や秦君は畑違いだから余程やらぬと落伍するぞ、勉強次第で独逸洋行をさせるしっかり頑張れ」と諭された博士の前を下ってきた彼は「石塚君、順序を待っていたら僕の洋行なんか何年後かわからぬ、学閥打破なしに医学の進歩はない。独立独歩だ、僕は彼等より先に洋行して見せる」と昂然と言っていたが、恰も良し、明治三十二年四月、米国フレキシナー博士一行が来朝北里研究所を視察した時、彼は案内や通訳をつとめて博士と知己になり、これが単身渡米の実現化を速めた。翌三十三年（二十五歳）十二月、血脇先生の温情の下に勇躍、米国へ鹿島立ちした。

その後の苦心研究成功美談は、天下周知のことで、我国では学校の教科書や学童唱歌等にも喧伝され、世界中の新聞雑誌に報道され幾十種かの伝記が陸續と出版され、文化人切手の第一位に取上げられた。紙面の都合上茲には詳述を省略する。

大正四年には野口博士は四十歳を迎えて、故郷忘じ難しではあったが、研究に没頭していた彼は仲々腰をあげなかった。所が晩春の或日、私が彼の生家を訪ねて、佗びしく暮す母しか女の老いたる姿を写真にとって、附近の風景其他を添えて彼に送って帰朝を促がしたところ、帰心矢の如く急に母を思うの情勃発して、九月五日十五年振りに思出多き横浜に到着した。朝野の歓迎、郷里の熱狂、恰も凱旋將軍を迎えるにも似て、彼は殆んど席暖らなかった。この繁忙の間にも彼は心ゆくまで師に恩を謝し旧友の情に報いたのは勿論、母親や小林恩父同夫人、血脇恩師を奉じ、関西各地の見物等に案内した行為には孰れも感激した。

樹欲静風不止、子欲養親不待との古語あり予が親友石塚兄より、故山老母の写真を送り呉れられし時、幾度が脳裡に映じ来り海濤万里の孤客心情炎ゆる許りの思をなせり、予今回万障を排して断然帰省せしは、偏にこの動機に出でたるものにして、予が同君に負う所実に筆紙に尽し難し。是処に再会を期し一別を告ぐるに臨み一言誌して之をのこす。

大正四年十月二十七日朝

於長陵 野口英世

引張風の如くプログラムが決定しているのを、私のために時間を割て特に新潟や長岡の講演に臨席して、私の宅に立寄りて前記の感想を揮毫された。帰米される一週間前私は上京して帝国ホテルのダブルベットで同床枕を並べて、伊皿子時代の物語や、将来の鴻図に就ての話合などして、無限の感慨に東天紅を告ぐるも知らぬばかりであった。

天長節祝日には石井外務大臣の招待があった。石井外相は私が血脇先生と清国北京滞在診療時代から格別の恩顧を受けていた。野口博士を外交上の殊勲者であるとの事実を挙げて激賞された。惜い哉、今一週間の渡米を延期されたならば、陛下御親謁の恩典に浴する事ができるのだと語られたのを今以て肝銘している。

次いで、大隈首相は私の懇請を容れられ、十一月三日午前に早稲田邸の会見となり、東西両偉人をカメラに収めることができ、隔意なき歓談の好機を与えられたのを快とする。

十一月四日博士は祖国を離れて渡米された佐渡丸甲板上の写真が永久の別れとなった。昭和三年五月二十一日は他界された命日である。飛電に接した私は哀痛の極、左の一律を賦して自ら慰めたのである。

天涯伝計断鴻愁、読到数行雙淚流、三十年来青眼友、一千里外白雲秋、学垂偉績輝医界、名聘殊邦壯帝洲、嘆息伊人難復見、夢魂宝趁海西頭併しながら、たとえ幽明境を異にするも、君は依然として激励指導して居らるる心地がする。私は今、野口博士の遺志を継ぎ、濟世濟民のため考案して残された靈藥の研究に、一身を捧げて成果を表わしたいと念願して居ります。

結 び

昭和24年11月3日、第1回の切手になった日本文化人が野口英世であることを明らかにするとともに高久 茂編、切手になった日本文化人が出版された昭和28年には野口英世記念会理事長で高山齒科医学院で寝食をともにした勿効の友で元衆議院議員 石塚三郎の「野口英世博士の生涯」を摘録し、切手と齒学史からみた野口英世の一端を明らかにした。

文 献

- 1) 吉川明 著：切手が語る医学のあゆみ 427～428, 東京, 医歯薬, 1986年4月,
- 2) 高久茂 編：切手になった日本文化人, 東京, 一二三書房, 昭和28年3月.
- 3) 石塚三郎：野口英世博士の生涯. 高久茂編切手になった日本文化人 44～48ページ
- 4) 本間邦則：野口英世と石塚三郎について, 日本齒科医史学会々誌, 第1巻第1号, 75, 1973年8月
- 5) 関山英夫：若き日の野口英世, 高久 茂編, 切手になった日本文化人, 44～48ページ